

「彼岸過迄」

——須永市蔵の孤独——

越智悦子

はじめに

我々は孤独な存在である。しかし、孤独は当然のことながら、自分が孤独と感じなければ、その人にとっての意味あるものにはならない。人間が個々ばらばらの存在であることは、原始の昔から現代に至るまで同様である。我々は独りでこの世に生み出され、独りで死んでいく。存在そのもののあり方として、事実として孤独である。が、孤独であることと孤独感を抱くことは別である。

〈孤独〉という概念はいつ頃生まれたのであるか。今ここで考えたいのは漱石の作中人物の孤独、従つて明治期の日本を背景とする人物たちが抱いた孤独感、つまり西洋から入つて来た個人といふ思想、近代的自我意識を背景に持つ孤独感についてである。

「彼岸過迄」は、前半と後半の格差によって完成度の低い作品であるとの評価を受けてきた。昭和四十三年六月に発表された越智治雄氏の論文「『彼岸過迄』の頃——一つのイメージ」以後、前半を重視する読みも数多く提出され、また前半と後半とを一貫

したものとして解釈しようとする論文も発表されている。が、この作品の前半と後半との格差、人間心理を描くにあたつての軽重の差、明暗の差は、この作品が前後アンバランスであるという読後感をもたらすものであることは否めない。

前半は敬太郎という〈語り〉の中心主体が彼の目に映る周囲のでき事、周辺の人々を、傍観者として空想をもまじえながら外から見る第三者の無責任さで語つているにすぎない。それに対して後半は、須永という主體自身が自らの内面を凝視し、分析し、語りだすという形を取つてゐる。従つて読者が後半により重要な読後感を持つのは当然といえば当然なのである。この稿においても、須永の孤独を考えるに当たつて後半に重心が置かれている。

(一)

須永の孤独にはいくつかの特色があると思われるが、彼を孤独の中に陥し入れる一要素として、まず彼の保守性が考えられる。須永市蔵は、大学を卒業したばかりの若さの眞只中にいる前途有

望な青年である。しかし、彼は敬太郎の友人として登場する「停留所」の章の冒頭において、「法律を修めながら役人にも会社員にもなる氣のない、至つて退廃主義の男であつた」と紹介される男である。そして彼には「幾何でも出世の世話ををして造らう」という「世間体の好い」「實際為になる」親類があるにとかわらず、彼自身は一向に動こうともせず、父親の残した財産によって生活の不安なく母と二人の静かな暮しをしている。

この父の財産によつて生活を支えられている状態、叔父松本の言うところの所謂「高等遊民」としての生活に安住している実態は、須永が古い型の生活を選んだ保守的人間であることを示している。つまり彼は、新しい近代産業社会の中で、労働による自己実現という近代生活人の生き方ではなく、古い封建社会の支配者層の生活形態である、他からもたらされる富をただ消費するだけの生活を送つてゐると言つてよい。

そして、その母との生活は前近代的、江戸の匂いを色濃く残存させている生活である。彼はすべてが「悉く伝説的の法則に支配されて、丁度彼等の用ひる烟草盆の様に、先祖代々順々に拭き込まれた習慣を笠に、恐るべく光つてゐる」ような、「徳川時代の湿っぽい空気が未だに漂よつてゐる黒い蔵造りの立ち並ぶ裏通り」に暮らしている。こうした空気の中で「長眼」を好む母親と共に「角帯をきうと締めてきちらと座る」須永の様子は「繊細な江戸式の開化の懷に、ぼうと育つた若旦那」と評すべき前近代的なも

のなのである。旧い伝統に囲まれ一人息子として、旧式の母親と共に昔風の習慣を「当り前の如く遺」り続ける須永には、新しい経験を何かしら吸収したがる敬太郎の冒險心のような「少し調子外れの自由」といつたものはない。須永は旧い世界に日常をどうぶりとつかり、その旧態依然としたあり方を変えようとしない。

こうした生活の中で培われた生活感覚から彼の「退廃主義」は生み出されるものであるし、彼の生活と感情とはこの旧い世界の中でバランスを保ち、静かな平安を保つてゐるのである。彼には現在自分を取り巻く世界を壊し、破り捨て、新しい世界の中に自らを投企することが生活感情において、情緒の上において恐ろしくできないのである。

須永の、この既存世界への執着を如実に示すのが母親との関係における彼の態度である。須永は、父親が死に際して彼に与えた忠告、その父親の葬儀の際に母親の語った言葉によつて、母親と自分との関係に「厚い疑惑」を抱き読いてゐる男である。須永にとって母親は、父親よりもよほど親しい人、「觀察に値しない程」親しい人であった。その自分に最も近い、最も親しかるべきははずの人が、父親の死を境に、須永にとっては（何者かわからぬ）存在と化し、その最も親しい人との関係に疑惑を持たざるを得ない孤独へとつき落とされたのである。彼はその疑惑から「母と自分」との性格や顔の造作を人知れず研究し、その結果、「長所でも母になくつて」自分「丈有つてゐると甚だ不愉快にな」り、「器

量が落ちても構わないから、もつと母の人相を多量に受け継いで

置いたら、母の子らしくて懸心持が好いだらう」と思い続けながらも、こうしたわだかまりを、事実を解明し、自らの不安を解消することによつて積極的に取り除こうとはしない。

この母と子の状態を、母の弟に当たる叔父松本は「愛情の糸で」「自然から確かり括り付けられてゐる」一人は、「何んな秘密を打ち明けても怖がる必要は更になのである。夫だのに姉は非常に恐れてゐた。市蔵も非常に恐れてゐた。姉は秘密を手に握つた儘、市蔵は秘密を手に握らざるだらうと待ち受けた儘、二人して非常に恐れてゐた。」と語つてゐる。

母親の側に、実の息子として育ててきた須永の秘密を秘密のままに永遠に隠りたいという願いがあつたことは確かである。この母の秘密への固執は須永が眞実を知るつとする勇気を弱める働きをしたであろう。しかしこの両者の「恐れ」には秘密を握つていふ者と秘密を握れないがためにその秘密にこだわり続けている者の決定的な差がある。須永の恐れは今、ここにある母と自分との関係を壊すことに対する恐れである。従つてその「畏怖の念」は「現在よりも明かな未来に存在してゐる事が多かつた。」と須永自身が語るように現在の状態を新しい未来へ置き換えることを恐れる彼の保守性の現われなのである。この、母親との関係を新たなものにできぬ須永の恐れは、千代子との関係において、より切実なものとなつて現われる。

(二)

須永は自分と千代子との間を自分の意志で、自分から何らかの方向に関係づけようとはしない。彼は千代子との結婚について一たんは「母の希望通り千代子を貰つて送りたいとも考へ」る。ところがまた一方、相手方の様子を見に出かけた先で、叔父夫婦が自分を千代子の「娘として肯がはない程らし」いのを認め、千代子自身も嫁に「來たがつてゐない事」を認めたと観察した須永は「成る可く自我を傷つけない様にと祈」ることになる。結局彼は、なし崩しに千代子との因縁の糸が、千代子の側から切られるのをただ待つ決心を強める。

ここで須永の態度をながめると、彼は叔父叔母の真意を「正式の申し込み」によつて確かめた訳ではない。ましてや、直接受け相手の千代子自身の気持ちを自ら確かめた訳ではない。ただ表層的に彼女の「言葉や様子から察して」いるに留まつてゐる。千代子は須永の結婚が話題に登つたとき、「妾行つて上げませうか」とはつきりと口に出して言つたのである。それに対して須永は、彼女の眼の中に何の意味も読み取れなかつたとして彼女の言葉に對する返事をしない。千代子の母親（叔母）が、「御前の様な露骨のがら（した）者が、何で市さんの氣に入るものかね」と「形式を具へない断り」と受け取れるような反応を示すのみである。須永はその時の千代子の態度を「蠢まりのない彼女の胸の中

を、其眞外に表はしたに過ぎない」と考へながら、そのわだかま
りのないはずの彼女の言葉を言葉通りに受け取ろうとはしない。

千代子の言葉は、須永の「察し」たようにその場かぎりの、深い
意味を持たないものであつたのだろうか。しかし、それを完全に
意味のないものにしたのは、千代子の投げかけたものを受け取る
うとしなかつた須永である。彼には、千代子の言葉をその場で受

け止めて、それを眞実の発言とするとも可能であつたかも知れ
ないのである。しかし、須永には自分の方から一人の関係を意味
深いものにして行く勇気がない。須永は何ごとによらず新しい事
態に向けて自分から働きかけることができない。彼の生活感情に
おける安全主義、保守主義がブレークとなつてゐる。

彼は「千代子を貰はない方へ懲りい」では行くが、かといつて、
それを決定する訳でもなく、現状の流れて行くに身を任せたまま
である。そうした中で、千代子の結婚に衝撃を受ける自分を見発
する機会が須永に与えられる。千代子が独りで留守番をしている
所へ訪問した須永は、子供の頃自分が千代子に描いてやつた絵を、
彼女が「恭御嫁に行く時も持つてく積よ」と語った時に動搖する。

僕は此言葉を聞いて悲しくなつた。さうして其悲しい気分が、
すぐ千代子の胸に應へさうなのが猶恐ろしかつた。僕は其刹
那既に涙の溢れさうな黒い大きな眼を自分の前に想像したの
である。

須永は千代子の言葉に心をふるわせながら、その感情に身を置

くことを恐れるよう、自分の感情を抑えてただ「そんな下らぬ
ものは持つて行かないが可いよ」と言い放つただけである。そ
して更に彼は「自分の気分を変へるためわざと彼女に何時頃嫁に
行く積か」と尋ね、千代子から結婚が極まつたのだという答を得たとき、氣分を変えるどころか更なる動搖の中に放り込まれる。

今迄自分の安心を得る最後の手段として、一日も早く彼女の
縁談が纏まれば好いがと念じてゐた僕の心臓は、此答と共に
どきんと音のする浪を打つた。さうして毛穴から這ひ出す様
な嵩汗が、背中と腋の下を不意に襲つた。

須永は、これ程までに自分の感情を動かされながら、「僕は今
迄気が付かずに彼女を愛してゐたのかも知れなかつた。或は彼女
が気が付かないうちに僕を愛してゐたのかも知れなかつた。」と
考へながらも、それでも「茫然として」じつとその動搖の中にう
ずくまるばかりである。彼は自分の頭で「想像」していた観念と
現実の自己の心の動きが相反するものであることに気づいても、實
際にそつて動くことができない。

続く電話の場面でも、千代子のコケットリーに乗せられながら、
その時の二人のやりとりを、そして何よりも自らの心持ちを「自
分の気分と自分の言葉が、半紙の裏表の様にびつたりと合つた愉
快を感じた」と自觉しながら、その千代子との「愉快な」気分の
通じ合いを育てようとはしない。

斯ういふ光景が若し今より一年前に起つたならと僕は其後何

過も繰り返し／＼思つた。さう思ふ度に、もう過ぎる、時機は既に去つたと運命から宣告される様な気がした。今からでも斯ういふ光景を二度三度と重ねる機会は捉まへられるでないかと、同じ運命が暗に僕を喫のかす日もあつた。成程二人の情愛を互ひに反射させ合ふためにのみ眼の光を使ふ手段を憚からなかつたなら、千代子と僕とは其日を基点として出立しても、今頃は人間の利害で割く事の出来ない愛に陥つてゐたかも知れない。たゞ僕はそれと反対の方針を取つたのである。

なぜ須永は「もう過ぎる」と決めつけるのか。「一年前」と、今との二人の関係が実際上それ程に隔たりのあるものとは思われない。にもかかわらず「其後何遍も繰り返し／＼思つた。」程の未練をひきずりながら、「さう思ふ度に、もう過ぎる」と考える須永は、自分独りで、自分から意識的に自己を開ざそうとしているのである。一方、須永は「今からでも」千代子と親密な通い合いを「重ねる機会は捉まへられるではないか」とも考える。しかし彼は考え、想像するのみであつて、自分からそのような場面を生み出す努力をしようとはしない。先の電話事件の際も、一方的に千代子によって作られた、千代子から仕掛けられたものに、乗つて行つたに過ぎない。須永には内から湧きあがる衝動によつて自らが自發的に、自らの意志で動くということがない。常に外からの刺激を待つて沈黙を守り、外からの働きかけによつて〈や

むをえず〉自分は動いたのだというボーズを取る。彼はそうした形によつてしか動くことのできない男なのである。従つて、彼は自分からは〈何も起こり得ない方向〉を取らざるを得ない。この須永の姿勢は、彼の保守性新しい事態へと一步を踏み出すことのできない彼の安全主義の現われであると同時に、その安全主義を須永に取らせてしまつ更に根源的な原因である彼の自意識、そこから生まれる彼の観念の呪縛をよく表わしている。

(II)

須永市蔵を孤独に陥し入れる根源的要因である彼の〈自意識〉の実態を、叔父松本は「市蔵といふ男は世の中と接触する度に内へとぐるを捲き込む性質である。だから一つ刺戟を受けると、其刺戟が夫から夫へと回転して、段々深く細かく心の奥に喰ひ込んで行く。さうして何処迄喰ひ込んで行つても際限を知らない同じ作用が連続して、彼を苦しめる。」と表現して見せる。そしてこの苦しみから逃れるためには、「内へ内へと向く彼の命の方向を逆にして、外へとぐるを捲き出させるより外に仕方がない。」「一口に云へば、もつと浮気にならなければならない。」と言ふ。しかし実際の須永はこれらのこと、自分自身で「既に承知して」おり、頭ではどうから理解していながら「実行は未だ出来ないで藻搔いてゐる。」常に〈自分〉というものにこだわり続け、〈自分〉を忘れることができない。「自分の心」を何かに奪われ〈無

我夢中〉になることがない。〈無我〉になることを、あたかも自分自身をその瞬間からすべて失うかのようふに恐れているのである。こうした須永を松本はさらに端的に「市蔵は自我より外に当初から何物も有つてゐない男である」と説明する。当然須永はこの唯一物である〈自我〉に執着し、それを安泰に保とうとする。〈自我〉が傷つくことを最も恐れる男にならざるを得ないのである。

須永に自分自身へのこだわり、〈自我〉の意識を根強く持たせた直接的な原因は、〈出生に対する疑惑〉であろう。彼は卒業をひかえた大学四年生の春に、叔父松本から自らの出生に関する事實を聞かされるまでは、自分ひとりだけつんぱさじきに置かれている不安を抱きながら、しかも一方では眞実を明らかめることに対する恐怖を抱きながら、自分はいったい何処の誰なのか、母親といつたらいどういうつながりを持ち得てゐる人間なのかという疑惑を自らの内でくり返し／＼反芻しながら成長した人間である。自己形成の基本的な場であり、幼少年期の人間にとつての全的

世界であるはずの家庭の中で、その根本である親子関係を、ましてや父の死後ただ一人だけ後に残された母一人、子一人の親子關係の中でのそのたった一人しかいない、従つて一人でありかつ全てである母親とのつながりを疑わざるを得ない須永は、常に自分自身の存在に不安を持ち続けていたはずである。須永は成長の過程で〈自分は如何なる存在なのかな〉を問ひ続けながら、「自分の事」を「毎日毎夜考へ」「余り考へ過ぎて頭も身体も続かなくなる迄考へ」「夫でも分らない」という苦しみを抱き続けて、常に自分自身を第三者としての自分が分析、検証し続けるを得ない状況の中で育つた男なのである。こうした経験を持つ男が〈自意識〉を過剰に増殖させた内面を持つに至るのは当然であろう。

須永に強い〈自意識〉を持たせたもう一つの大きな要因に彼の〈高等遊民〉性がある。彼は高い教育を受け、高い知的水準に達しながらも、労働に従事することなく、父親の残した財産によつて生活を支えられ、何の生活上の苦労をも持たずに暮らしている。須永は日々の生活に追われる事がない。生活を支えるための労働に苦しむ必要がない。そういう世間的な雑念に悩まされることがないのである。つまり須永の〈自意識〉の苦しみは日常の〈生活〉からかけ離れているが故のもの、〈生活〉に追われる必要のない余裕が生み出るもの、雑多な世間の活動から、逃れられるだけ、それだけ純一に〈自己〉だけを見続けることが可能であつたが故の苦しみと言えなくもないのである。

そして更に、この〈生活者〉としては希薄な生き方を助長するものが、彼の身に付けて来た高等教育であったと言えるだろう。この高等教育が〈生活者〉としての力強い進展を阻止するものとして働くことは、作品の冒頭から、須永とは対照的な人物として造形されている森本を通して繰り返し伏線がはらわれている。

森本は教育もなく、有利な背景も持たぬ、裸一貫で、行き当り

ぱつたりに、様々な事柄に頭を突っ込んでは波乱万丈の世渡りをしている冒険者として登場している。この男も決して幸福な暖い人生を歩いている人間ではないが、しかし、彼の苦しみはほとんど（生活）そのものに根ざした苦しみ、生きること、生存そのものに直結した苦労とでも呼ぶべき苦しみである。その男が、大学

出である敬太郎が就職先を求めながら「変った事が為て見たい」とうろうろしている姿を見て「世の中には大風に限らず随分面白い事が沢山あるし、又貴方なんざ其面白い事に打つからう／＼と苦労して御出なさる御様子だが、大学を卒業しちやもう駄目ですよ。いざとなると大抵は自分の身分を思ひますからね。」と評する。高い教育を身に付けていることが、人間の虚榮心に反映し、かえって本来の自分を失うことを指摘したものであるが、同旨の事を敬太郎自身が須永の前で述懐してみせている。

教育は一種の権利かと思つてゐたら全く一種の束縛だね。いくら学校を卒業したつて食ふに困るやうぢや何の権利かこれ有らんやだ。夫ぢや位地は何うでも可いから思ふ存分勝手な真似をして構はないかといふと、矢張り構ふからね。厭に人を束縛するよ教育が

この敬太郎の不平に対する須永の態度は「余り同情がない」ものであった。須永に之っては、この、敬太郎の「忌々しさうに嘆息する」学問が位地を限定するといった、外に表われた実際的な束縛よりも、学問が自身の内面的感覚生活を束縛することそのも

の方が、より深い重要な問題であったはずである。

須永は「軍人の子でありながら軍人が大嫌いで法律を修め」た男である。彼は封建時代の支配者としての武士の流れの上にある伝統的な権威としての「軍人」ではなく、明治になつて新しい近代国家の確として西洋から移入した「法律」を學問として選んだ、新しい時代の洗礼を受けた新しい型のエリートである。彼が選び取つた學問は新しいものの考え方、近代的思考の上に成り立つものであつて、従つて須永の頭は西洋の近代思想に染めつけられた、近代知識人としての働きをしている。彼が千代子を説明するための例として話した「ダヌンチオ」も、自分自身の「頭」と「心」の関係を説明するための例え「ケダンケ」も西洋の物語であり、自分と千代子との関係を説明する「恐れない女と恐れる男」という言葉も、「自分の作つた言葉でなくつて、西洋人の小説に其抜出てゐる様な氣を起す」とあるように、須永の〈自意識〉による苦しみは、西洋から入つて来た近代思想、その個人主義的思考からもたらされる近代的自我の苦しみと言つて良かろう。西洋からの學問を通して、近代的思考を身につけた須永は〈近代的自我〉に覺醒しており、その上「自尊心」の強い父親の血をひく人間として、〈自己〉にこだわらざるを得ない。そして、その〈こだわり〉に對して、學問を積んだ頭が觀念的な説明をしようとする。この常に頭がすべてに先行して働いてしまう苦しみ、その虚しさを須永自身、「僕の頭は僕の胸を抑える為に出来てゐた。行

動の結果から見て、甚しい悔を逃さない過去を顧みると、是が人間の常体かとも思ふ。けれども胸が熱しかける度に、嚴肅な頭の威力を無理に加へられるのは、普通誰でも経験する通り、甚しい苦痛である。」と語つてゐる。そしてこの〈頭〉が〈心〉より先行する結果を、須永はしばしば「取り越し苦労」という言葉で説明する。彼の苦しみは、自分独りで觀察し、自分独りで觀念的に捉え、説明し、空想による〈取り越し苦労〉をしては自分独りで苦しむという、まるで独りで立ち回りに息を切らし、独りで相撲を取つてはいるような結果に陥つてゐるのである。すべては彼の強い〈自意識〉から来る彼の觀念的な頭の働きによるものであり、この頭の鋭い觀念的思考を彼に身に付けさせたのが、彼の學問研究であつてみれば、須永の苦しみは彼の身につけた學問から来る苦しみとも言えるのである。

(四)

須永の頭は新しい近代的自我にとらわれており、意識的には自らを個の存在と感じ、他者をも別の個の存在として把握するため、他者との関係を個対個の闇と見なさないではいられない。彼は常に個としての自分と他者との距離を斟酌し、相手の出方による自分への影響をはかつては自らの進退を判断しようとする。こうした自意識のとりこになつてゐる人間に、恋愛に代表される豊かな感情生活が不可能であることは、塙田良平氏が「漱石文学の主人

公のもつ一般的態度」として、三四郎に対して示した「三四郎は恋愛のできる男ではない。相手を計量し相手の出方次第で自分の感情の始末ができるほど知的な存在である。いはゞ、一種のセンチメントを楽しむことはできるが、それを自己の存在の安危に及ぼす感情生活にまで深入りさせる性質の男ではないのである。」

（『孤独の発生——三四郎・それから・門』）昭31・12『解釈と鑑賞』といふ指摘がそのまま須永にも当てはまるところで明かる。塙田氏は、自己感情のコントロールを「知」の働きによるものと論じてゐるが、この「知」による感情抑制は、コントロールといった有効性をはるかに乗り越えて、「行人」の一郎に代表される「多知多解」の苦しみといった人間としての存在そのものをおびやかし、人間性を疎外するものとして働くようになる。さらには、彼の頭による判断が、常に現実と一致する訳ではなし、彼の頭で觀念的に作り上げた想像が實際の彼自身の感情と連動しないことも恵々にして生じる。それは千代子との関係を通して描かれる須永の心の動きに明かである。須永は千代子の結婚が卒業前に決まることを自分は望んでいたと考へていた。彼女が彼女自身の結婚を自分とは無関係のところで決定し、須永の母の、自分達の家族の一員として千代子を取り込みたいという願望が、千代子の側の決定によつて、自然に無効になることを望んでいた。つまり、千代子は自分の所有物ではないし、所有できるはずもない者、自分とは切り離された別個の存在であり、自分は彼

女を所有したいとは考えていない。従つて、千代子が自分にとつては見ず知らずの第三者と結婚してくれることで、母親のもくろみから自由になり、自分自身の安心を得られると思っていた。しかし実際の彼の心は千代子の結婚をきいて、激しく動搖せざるを得ない。そればかりか、千代子の傍に、彼女の結婚相手になり得る青年を見ただけで、嫉妬しないではいられない。彼の頭と心とは、観念と感情とは連動していない。彼の感情は、いつしか千代子をほとんど自分のもの、すくなくとも自分の側に所属するものと感じており、自分とは無関係の個としての他者とは感じられなくなっているのである。ところが、彼は自分の実際の心とは切り離された、観念の中で自分と千代子の精神を個々のものとして分析し関係を解釈しては、頭の中だけでこね上げた空想の中にじっと浸っている男なのである。

この須永の、意識の表面上では、近代的な思考によって人間を、なかなか自分自身を知的に理解し得ていると信じていたにもかかわらず、深い内面における無意識の感情は決してそのまま表面上の意識とはつながっていない。明治の青年の現実は、彼の周囲をとり巻く街によつても象徴されている。須永は、近代文明の象徴とも言える電車が「入れ代り、立ち代り」往来し、「何處の何物とも知れない男女が聚まつたり散つたりする」表通りから、ほんの「小路を二三度曲折」するだけで行き着ける裏通りに住み、第一節で述べたような、江戸の匂を漂わせる旧い生活をしている。

しかも、その旧い家並の家々も、家ごとに營まれる生活自体は旧態依然としたものであつても、家どうしのつながり、近所づきあいを通しての下町の一体感は失われ、「名も知らない都會人士の巣を形づくつてゐる」。つまり、一步表通りに出れば、巨大な電車が大道路をひっきりなしに往来しては近代という新しい時代を象徴し、表面に現われたものは、他者に干渉されない個人主義的な、一見整った近代的清潔感あふれる都市であるものの、一步内へ入つてみればその裏通りはこまごまとした家々が、旧時代の造りを残したまま立ち並び、表面に表われない内部では「伝統的の法則に支配され」「習慣に縛られ」たどろどろとした実生活が営まれてゐるのである。

この、表面上に現れたポーズとしては表通りの近代的な形象を見せながら、内面の奥深いところでは前近代的実質に支配されているというアンバランスな明治の東京の街のあり方は、そこに住む須永という青年の、頭で理解解釈できる表面的な思考と、内面の感情がちぐはぐであること、思想が生活に根ざしていない表層的なものでしかないこと、つまり、近代的個人主義思想を理解し、獲得していると考へていた頭と、千代子を他者として、自分とは切り離された別の主体性を持つ個人として認めることが出来ない感情とのアンバランスを暗示しているかのようである。

須永と千代子との関係に話をもどすと、須永は自分が心の深い所では千代子を愛しており、千代子もまた須永を真実愛している

という事実を認識した後も、自分が頭の中で観念的にこねあげた一方的な千代子像によって、彼女を妻にはできないと考える。それでいながら鎌倉で実際に彼女の傍らに健康的で晴朗な青年を見いたした時には、嫉妬に動搖せざるをえない。須永は自分と、青年高木と千代子との間に起こうた一挙手、一投足を分析し、あれこれ空想してみないではいられない。ところが当然ながら須永の観念の産物でしかない空想は、空想である以上如何様にも可能であつて、彼はその様々な場合を想定しては解釈し、解釈しきれない自分に焦立ち「僕は此一日間に娶る積のない女に釣られさうになつた」と、自閉した観念の中で千代子の技巧をさえ疑うようになる。眠られぬ須永は、鎌倉から母を送つて來た千代子を階下に感じながら「技巧の二字を何处迄も割つて」考え続ける。そして最後に「技巧なら戦争」であり、「戦争なら何うしても勝負に終わるべきだと考へ」寝付かれないで負けてゐる自分を口惜しく思う。須永は「自分がまだ眠られないといふ弱みを階下へ響かせるのが、勝利の報知として千代子の胸に伝はるのを恥辱」とさえ思つるのである。

須永はいつたい何のために戦つているのか。須永はあまりに自己に執着しそぎ、自己の考え、自己の頭の働きにとらわれすぎた結果、自分と千代子との関係の本質を見失つてゐるのである。須永は千代子を愛していた。自分が千代子を愛し、千代子も自分を愛しているらしいことを気づきながら、その愛の対象である当の

本人とさえ、自分の面子、自尊心をかけた戦争をしてしまう。その戦争の根本原因は、戦の相手であると考える千代子への愛、千代子に惹かれている心と、その感情に我を忘れて自己投企することを阻む冷めた自意識とであるのに。あまりに自分にこだわりすぎた結果須永は自分独りでキリキリと空回りをし、大切な本質を見失い、自分と相手を傷つけながら錯乱したまま不快の感情の中へ沈み込んで行かざる得ない。自分で自分を苦しめているのである。果ては自分の頭の中だけでこね上げたにすぎない、千代子と自分と背木とをめぐる苦悶の三角関係の物語。その空想の「小説」を現実化しなかつた自分自身を評して、「人は僕を老人見た様だと云つて嘲けるだらう。もし詩に訴へてのみ世の中を渡らないのが老人なら、僕は嘲けられても満足である。けれども若し詩に涸れて乾びたのが老人なら、僕は此品評に甘んじたくない。僕は始終詩を求めて藻搔いてゐるのである。」という。自分自身が傷つかぬようには他者を遠く避けながら何一つ傷つくことなく、「詩を求める」つまり、他者と互いの流露にまかせた感情の交流を通して他者に出会いたいという、矛盾した自己を露呈することになる。

そして須永はこうした自己の矛盾の行く先を「ゲダンケ」の主人公と自分との比較を通して空想し、自らの心を次のように分析する。

僕は平生の自分と比較して、斯う顧慮なく一心に振舞へるゲダンケの主人公が大いに羨ましかつた。同時に汗の滴る程恐

ろしかつた。(中略) 始めは人間の元来からの作りが遠ふん

だから、到底も斯んな眞似は為得まいといふ見地から、直比問題を棄却しやうとした。次には、僕でも同じ程度の復讐が充分遣つて除けられるに違ひないといふ気がし出した。最後には、僕の様に平生は頭と胸の争ひに悩んで愚図つてゐるものにして始めて斯んな猛烈な兎行を、冷靜に打算的に、且つ組織的に、逞ましうするのだと思ひ出した。(中略) 斯う思つた時急に変な心持に襲はれた。(中略) 丁度大人なし人が酒の為に大胆になつて、是なら何でも過れるといふ満足を感じつゝ、同時に醉に打ち勝たれた自分は、品性の上に於て平生の自分より遙かに堕落したのだと気が付いて、さうして墮落は酒の影響だから何處へ何う避けても人間として到底も逃れる事は出来ないので沈痛に諦らめを付けたと同じ様な変な心持であつた。

ここには〈自我〉という概念を獲得すると同時に、その自我から生まれる自省、深い内省に苦しまざるを得なくなつた近代人の、自省のない人間への憚れと恐れとが語られると同時に、鋭敏すぎる頭の働きによつて動けなくなつてしまつた知識人の鬱屈した精神が、外からの何らかのきっかけによりバランスを崩され、その自縛の精神の崩壊による一種の解放に寄りかかりながら、つまり崩壊を理由に諒めを手中にしながらバランスの崩れ、換言すれば〈狂〉によつて初めて感情のままに言動できる姿が、白昼夢とし

て語られているのである。
この須永の苦しみはそのまま「行人」における一郎の「懃々女も氣狂にして見なくつちや、本体は到底解らないのかな」という感慨につながつてゐる。

結局須永はじつとしたまま助かない。「それから」の代助のようすに觀念的な人間から實際的な人間へと移行することもなく、それを目指すこともない。しかし、須永の孤独がいくらかでも救われているとすれば、彼にはそれがたとえ義理の間柄であつても母親を愛し、信頼し互いに親密な関係を結び得ること。またその母親の弟である叔父を尊敬し、彼の言葉に耳を傾ける余裕のあることである。つまり須永は、自分の置かれた家庭の中でドメスチック・ハピネスを獲得し得ていた訳で、そのハピネスを壊らせていた疑惑が取り除かれさえすれば、彼の精神はこれまでよりもはるかに晴朗になり得た。實際、旅先からの須永の手紙がそれを明かに示しており、松本に「端書に満足した僕は、彼の封筒入の書翰に接し出した時更に眉を閑いた。といふのは、僕の恐れを抱いてゐた彼の手が、陰鬱な色に巻紙を染めた痕跡が、その何処にも見出せなかつたからである。」と言わせる程ほがらかな、のびのびとした精神を獲得し得てゐるのである。